
転生 ヴェスペリア

サレナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生 ヴェスぺリア

【Nコード】

N4653R

【作者名】

サレナ

【あらすじ】

神に間違っ て殺されてヴェスぺリアの世界に……

始まりかな？（前書き）

初めての投稿です。素人が作る小説なので、読みにくいと思いますが、頑張っていきたいと思います。

始まりかな？

周り一面、白い空間ここは何処なんだろう？と思っていると、

「本当にすいませんしたああ〜」

いきなり変なオヤジが土下座してきた

「ちょっと変なオヤジはないでしょ」

ん？声にだしてたか？「違うよ心を読んだ」何？心を読んだだと変なオヤジの癖にいや変態の方がいいか

「ちょ変態って、儂は神じゃ」

神だと？頭大丈夫か？まあいいや、その神が何の用だ

「実は……お主は本来死ぬはずじゃなかったんじゃ」

これってまさか転生フラグじゃね

「そうか、間違って死んだんだ。それなら転生させてくれない？」

「良いぞ。」

「それと何か能力くれない？」

「良いぞ、でも転生する場所はテイルズオブヴェスペリアしか駄目じゃぞ」

マジか俺てきには、ダカーポとかの方が良かったんだけど……でもテイルズの中で一番好きだからいいか

「それじゃあ能力は魔術はすべて使える様に威力は最強にしておいて、剣術も最強にしてあと治癒術も使える様に、始祖の隸長と会話出来る様にフレンやユーリの幼馴染みって設定で顔は…何でもいいくらいでいいや」

「……分かった。では送るぞ、」
そして光に包まれて消えた。

第0話（前書き）

始まりって確かこんな感じだった様な……

第0話

この世界、テルカ・リュミレース

大地と海が何処まで続くのか、知る人はいない

なぜなら……

世界にうごめく魔物たちに比べ、人はあまりにも弱い

我々の住む街を守る結界、我々は己を守るためにその中で生きながらえている

それを成す、核となる魔導器

世界に満ちた根源たる力、エアルを使い、
魔導器は、

火、水、光、繁栄に必要な、

ありとあらゆるものを、今日まで我々に与え続けてきた

やがて、いつの日か、

結界の向こうに、

凶暴な魔物が生息する事も我々は忘れてしまふのだろう

繁栄と成長を続ける世界……

すべての人々のための平和、魔導器の恩恵により更なる発展を遂げていくだろう

平和の礎である帝都ザーフィアスより願う『世界が穏やかであるように』

第0話（後書き）

ヒロインを誰にしようか悩んでいます。
誰がいいですか？意見を下さい。

主人公設定です。一応……（前書き）

主人公は転生する前は犬のテイルズ好きです。

（）……心の声

主人公設定です。一応……

名前……レイ・タチバナ（仮）（男）

年齢……19歳

容姿……童顔で女顔、初めて見る人は女性に間違っことも、声も若干高い…髪はユーリ位ある。金髪

身長……163cm

性格……仲間想い、若干鈍感、お化けが苦手、困っている人がいたら、ほっとけない、キレたら恐ろしい。

実力……ドンと闘い勝った事がある。

闘い方……主に双剣を使うが他のを使っても十分強い。

……ユーリとフレンが騎士団に入る時に旅に出た。本人は身長が高くないことと、顔のことを気にしている。が、それを利用してユーリ達をよくからかう。声真似が得意。

最近は自分が転生してテイルズの世界に来たことを忘れている。

主人公設定です。一応……（後書き）

これが今回の主人公です。後でつけたすかも……

デイドン砦（前書き）

デイドン砦から始まります。

ほとんど覚えてないので変だと思います。

デイドン砦

レイ「デイドン砦に来たものの何するかな？」
カンカンカンカン

レイ「ん？警報？」

ドドドドドドと魔物の群れがこっちに向かってきた

レイ「マジかよ！ってあれユーリじゃん何やってんだ？」
と思っていると、ユーリという青年は人形を持ち門が閉まるギリギリのところで間に合った様だ。

レイ「よし、ユーリのところに行ってみよう。」
と言うとユーリの方へ向かって行った。

レイ「お疲れ様。ユーリ」

ユーリ「お…お前！レイ！今までどこ行ってたんだよ！」

レイ「いや〜旅に出るって、手紙書いたじゃん。それより、ユーリこそ女性連れて何してんだよ。」

（まあ知っているけどね）

ユーリ「手紙ってお前『旅に出る』しか書いてなかったぞ、しかもいきなり居なくなるし」

ユーリは呆れた様に言った。 ???「私エステルーぜって言います。エステルとお呼びください。」

とユーリの隣に居た女性もといエステルはレイに向かって言った。

レイ「僕はレイよろしくな！」

マンよ、商売から流通までを仕切らせてもらってるわ」

ユーリ「ふ〜ん、ギルドね……」

すると、 トドトドトド、トドトドトドトド、トドトドトドトドと地響きが鳴った。

カウフ「私、今、困ってるのよ。この地響きの元凶のせいで」

ユーリ「あんま想像したくねえけど、これって魔物の仕業なのか？」

カウフ「ええ、平原の主のね」

エステル「平原の主？」

カウフ「魔物の大群の親玉よ」

ユーリ「あの群れの親玉って……世の中すげえのがいるな」

エステル「どこか別の道から、平原を越えられませんか？先を急いでるんです」

カウフ「さあ？平原の主が去るのを、待つしかないんじゃない？」

ユーリ「焦っても仕方ねえってわけだ」

エステル「待つてなんかいられません。わたし、他の人にも聞いてきます」

とエステルは去って行った。すると一回ユーリの方を見てラピード

がエステルを追い掛けた。

ユーリ「流通まで取り仕切ってるのに別の道、ほんとに知らないの？」

カウフ「主さえ去れば、あなたを雇って強行突破って作戦があるけど、協力する気は……なさそうね」

ユーリがニヤと笑い

ユーリ「護衛がほしいなら、コイツに……ってレイの野郎も居ないし……」

=====

レイ視点

レイ「危なかったあゝまさかあそこにカウフマンがいるとは……（汗）」

（確か次はクオイの森だったよな、入り口の前で待ってよ）

=====

レイ「おゝゝい、別の道見付かった？」

ユーリ「お前、今まで何処に行ってたんだよ！」

レイ「何かちょっと嫌な予感がして逃げた。まさか、ユーリ僕を売ろうなんてしてないよねえ」

ユーリ「ギクッ……………そっそんなことねえよ、はやく行くぞ」

エステル、レイ（売ろうとしたん（だ）（ですね）（

……………

おまけ（前書き）

スキット風につくってみました。

おまけ

嘘つくな！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ユーリ「しっかし、久しぶりだな！お前旅に出てから一回も帰って来なかったもんな。」

レイ「まあね、一回は帰ろうと思っていたら、デイドン砦でばったりと会ったからね。」

エステル「ユーリとレイはどんな関係なんです？」

レイ「もちろん、恋人関係だよね、ユーリ？ 甘い声で」

ユーリ「違うだろ！！（怒）」

レイ「えっ、僕とは遊びだったの（涙）」

エステル「ユ、ユーリ！！それは酷いですよ、見損ないました。」

ユーリ「エステルも信じんなよ」

レイ「あはははははは、嘘だよ嘘」

ユーリ「大体レイは、男だからな」

エステル「えっ、嘘だったんですか？……って男性だったんですか！？」

ユーリ「やっぱり、男に見えないよな、レイって」

レイ「…………男だもん。」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

関係は？

エステル「ユーリとレイの本当の関係は何なんです？」

ユーリ「オレとフレンの幼馴染なんだよ。」

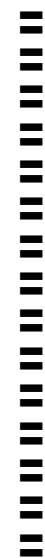
レイ「そう言えば、ユーリ騎士団はどうしたの？」

「……辞めたんだよ。」

レイ「そっか。予想はしてたけどさ、（どうせ下町のためだろう）フレンは？」

「ユーリ、フレンは小隊長してる。」

レイ「フレンが小隊長か……出世したね。」



おまけ（後書き）

また、つくりたいと思います。

クオイの森

エステル「……この場所にあるって、まさか、クオイの森……？」

ユーリ「ご名答、よく知ってるな」

エステル「クオイに踏み入る者、その身に呪い、ふりきる、と本で読んだことが……」

ユーリ「なるほど、それがお楽しみってわけか」

レイ「お楽しみって何？」

ユーリ「ちよつとな」

ユーリとレイは奥に進もうとした。

エステル「……」

エステルは呪いを気にして進もうとしなかった。

ユーリ「行かないのか？ま、オレはいいけど、フレンはどうすんね？」

ユーリは振り向きエステルに言った。

エステル「……わかりました。行きましょう！」

エステルは覚悟を決めて奥に進んだ。

＝＝＝＝＝＝

エステル「何の……音です？」
何か変な音が聞こえた。

エステル「足元がひんやりします……。まさか！ことが呪い！？」

エステルは怯える様にユーリ達に聞いた。

ユーリ「どんな呪いだよ」

エステル「木の下に埋められた死体から、呪いの声がじわじわと這い上がりわたしたちを道連れに……」

ユーリ「おいおい……」

ユーリは呆れた様に言った。

レイ「お化けはいない、お化けはいない、お化けはいない、お化けはいない……」

レイは念仏の様に何かを言っていた。

ユーリ「おい、レイ大丈夫か？」

レイ「お化けはいないお化けはいないお化けはいないお化けはいない、はっ……どうしたの？ユーリ？」

ユーリが声をかけたら、レイは正常に戻った。

ユーリ「……いや、何でもねえ」

ユーリは苦笑いしながら答えた。

エステル「……あれは？」

エステルは何か見つけた様でユーリ達に尋ねた。

ユーリ「これ、魔導器か。なんでこんな場所に……」

ユーリとラピードは近づいた。

レイ「少し休憩しよっか」

ユーリ「そうだな」

レイはエステルが辛そうにしてるのを見てユーリに同意を求め、賛成した。

エステル「だ、大丈夫です」

エステルはこれを断って歩きだした。そして、魔導器の前で止まった。

エステル「……あれ、これは？」

いきなり、魔導器が光った。

ユーリ、エステル『うわっ「きゃっ」』

そして、エステルが倒れた。

レイ（……………）

ユーリは慌てて、エステルに駆け寄った。

ユーリ「おい、エステル！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

エステルはラピードに枕かわりになってもらって、寝ている。レイは周りの警備を、ユーリは落ちてたニアの実を食べようとしていた。

ガリッ

ユーリ「にがつ」

すると、エステルが目を覚ました。

ユーリ「大丈夫か？」

エステル「うつ……………少し頭が……………。でも、平気です。……………わたし、
いたい……………」

ユーリ「突然倒れたんだよ。何か身に覚えはないか？」

エステル「もしかしたら、エアルに酔ったのかも知れません」

ユーリ「エアルって魔導器動かす燃料みたいなもんたる？目には見えないけど、大気中にまぎれてるやつ」

エステル「はい、そのエアルです」

レイ「濃いエアルは人体に悪い影響を与えるんだよ、エステル大丈夫？」

周りの警備から帰ってきたレイが説明した。

エステル「はい、大丈夫です。」

ユーリ「ふーん、だとすると呪いの噂ってのはそのせいなのかな」とすると、エステルが立ち上がった。

レイ「倒れたばかりなんだから、もう少し休みな」

エステル「そうはいきません。早くフレンに追いつかないと」

ユーリ「また倒れて、今度は一晩中起きなかったらどうするんだよ」

エステル「でも……そうですよ。ごめんなさい……」

=====

エステル「フレンが危険なのにユーリ達は心配ではないんですか？」

ユーリ「ん？そう見える？」

レイ「うん」

エステル「……はい」

ユーリ「実際、心配してねえからな。あいつなら自分で何とかしまうだろうし、あいつを狙ってる連中にはほんと同情するよ」

レイ「確かにね」

エステル「え？」

ユーリ「ガキの頃から何やってもフレンには勝てなかったもんな。かけっこだろうが、剣だろうが、そう上、余裕かまして、こう言うんだぜ？大丈夫、ユーリ？ってさ」

エステル「うらやましいな……。わたしには、そういう人、誰もいないから」

ユーリ「いても口うるさいだけだぞ」レイ「……よし、そろそろ行こうか。」

＝＝＝＝＝＝＝＝

ラピード「グルルルル……」

ラピードが草むらの方を向いて威嚇していた。

ガサガサ

ユーリ「ん？」

ユーリとエステルは音のした草むらの方を向いた。

？「エッグベアめ、か、覚悟！」

いきなり、草むらから飛び出して来た。自分の武器を振り回しながら。

？「うわっ、とっ」とっ！

ヒュ、バシッ

ユーリは、自分の武器を左手に持ち、タイミングを計って攻撃をした。回っていた少年は転んだ。

？「うあああっ！あうっ！う、いたたた……」

転んだ少年にラピードが近づいた。

？「ひいいっ！ボ、ボクなんか食べても、おいしくないし、お腹壊すんだから」

ラピード「ガウッ！！」

？「ほ、ほほんとに、たたたすけて。ぎゃあああ~~~~~！！！」

ユーリ「忙しいガギだな」

エステル「だいじょうぶですよ」

？「あ、あれ？魔物が女の人に」

レイ「魔物が人になるわけねーだろ」

ユーリ「ったく。なにやってんだか」

=====

？「ボクはカロール・カペル！魔物を狩って世界を渡り歩く、ギルド『魔狩りの剣』の一員さ！」

ユーリ「オレは、ユーリ。それにエステルとレイ、ラピードだ」

ユーリが代表として自己紹介をした。

ユーリ「んじゃ、そういうことで」

エステル「あ、え？ちよつとユーリ、レイ！」

ユーリとレイは歩いて行った。

エステル「えと、ごめんなさい」

エステルはカロルに向かって頭を下げてユーリ達を追い掛けた。

カロル「へ？………って、わゝ待って待って待って！」

カロルは急いでユーリ達の前に出た。

カロル「3人は森に入りたくてここに来たんでしょ？なら、ボクが………」

エステル「いえ、わたしたち、森を抜けてここまで来たんです。今から花の街ハルルに行きます」

カロル「へ？うそ！？呪いの森を？あ、なら、エッグベア見なかった？」

レイ「いや、見なかったと思うけど」

カロル「そつか………なら、ボクも街に戻ろうかな………あんまり待たせると、絶対に怒るし………うん、よし！」

レイがカロルに近づき耳元で

レイ「ナンちゃんにか？」

カロルがビクツとしてレイを見た。

レイ「冗談だよ冗談、アハハハハ」

レイは爆笑していた。

レイ「アハハハハハ、そうだ、先にハルルに行つて後で合流出来たら、するから」

ユーリ達にそう言つて来た道に戻つて行つた。

クオイの森（後書き）

次の投稿はいつになるか……

ハルルの街（前書き）

主人公のしゃべり方を変えました。

僕
俺

ハルルの街

ユーリ達と別れて魔導器のあった所を目指して、きた道を戻っている今日この頃。しかも今は、何故か3匹のウルフに囲まれている。すると1匹のウルフが飛びかかってきた。

レイ「チツ、面倒だな」

腰の所にある2本の剣の内、1本を右手に持ち ウルフの首を斬った。すぐに残りのウルフに向かって魔法を放った。

レイ「エアスラスト」

ズシャズシャ

ウルフ達は風の刃に切り刻まれて絶命した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

魔導器の所に着くと1人の男がいた。

レイ「やっぱりいると思ったよ。」

？「……何だ、レイか」

レイ「デュークあなたは、ここで何やってんの？まあある程度わかるけど」

デューク「これだ」

デュークは魔導器の方を示した。

レイ「やっぱりな、まだそんなことやってんの？」

デュークは世界中で暴走している魔導器を止めて回っているっぽい。

デューク「ああ……」

デュークはそっけなく答えた、相変わらずだな。

デューク「お前は、何故ここに？」

レイ「ん？あっそうそう、さっき通った時にちよつと気になってね。そして来てみたら、あんたが居たつとそんな感じ。」

デューク「そうか………それではな。」

デュークは去って行った。

確か次はハルルの結界を直すんだっけ？もう何十年も経ってるから忘れてきたな。

ズシン　ズシン

ん？何か足音が聞こえる。後ろを振り返ると、それはそれは大きな熊さん　もといエックベアがいました。

レイ「俺の後ろに立つんじゃねええええ」

某穴子さんみたいな事を言って斬りつけた。ん？ちよつと待てよ、エックベアの爪って確か必要だった様な………よし、採るか

＝＝＝＝＝＝

爪って案外簡単に採れるもんなのな、まあ関係ないか さてハルルにでも行つてユーリ達に合流するか。

エステル「レイ！」

あっちから来たし…

ユーリ「お前、まだここにいたのか？」

レイ「いや、用はもう終わつてハルルに行こうとしていた所。ついか何でお前達戻つて来てるの？」

エステル「それが、ハルルの樹の結界魔導器を治すためにニアの実とエックベアの爪が必要なので……」

レイ「なるほど、…でもエステルの目的は違くなかった？」

エステル「それは……」

レイ「まっ、そういう事なら、ほれ、」

ユーリにニアの実、エックベアの爪を渡した。

ユーリ「ちょ、お前これどうしたんだ。」

レイ「ん？それ？さっきエックベアに襲われそうになったから、返

り討ちにして採ってきた。」

平然として答えた。

カロル「えっ！？狂暴なエックベアを1人で……」

ユーリ「まっ、レイだからな」

エステル「す…凄いです。」

カロルとエステルは驚き、ユーリは何故か納得していた。

レイ「そんなことより、そんなの何に使うんだよ。」
確かパナシアボトルを作るんだっけか

カロル「パナシアボトルを作るための材料だよ」

エステル「後は、ルルリエの花びらだけですな。」

レイ「そうなのか…じゃあハルルに戻るのか？」

ユーリ「そうだな。」

ハルルに戻るために進んで出口の近くまで来た所で

？「ユーリ・ローウェル！森に入ったのはわかっている！素直にお縄につけい！」

レイ「呼ばれているぞ、ユーリ。」

ユーリは呆れた様に

ユーリ「この声、冗談だろ。ルブランのやつ、結界の外まで追っつきやがったのか」

カロル「え、なに？誰かに追われてんの？」

ユーリ「ん、まあ、騎士団にちょっと」

カロル「またまた、元騎士が騎士団になんて……」

カロルは冗談だと思っていたが、ユーリが無言で本当だと分かり

カロル「え、え、ええっ！！」

驚いていた。

？1「す、素直に出てくるのである」

？2「い、今ならボコるのは勘弁してあげるのだ」
2人は脅えた声で言っていた。

ルブラン「噂ごときに怯えるとは、それでもシュヴァーン隊の騎士か！」

ルブランは真逆で叫んでいた。

カロール「……ねえ、何したの？器物破損？詐欺？密輸？ドロボウ？人殺し？火付け？」

「脱獄だけだと思っただけだと……」

俺はユーリに近づき、エステルをチラッと見て

レイ「誘拐も……か」

「ユーリかもな。」

俺とユーリは小さい声で話した。

ユーリ「ま、とにかく逃げるぞ」

11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532
 533

ユーリ「これでよし」と

近くにあつた草などを使って道を塞いだ

エステル「だ、だめですよ！無関係な人にも迷惑になります！」

レイ「誰も通らないと思うけど、ここ、呪いの森だし」

=====

ハルルに着いた。すっかり空は暗くなり、夜になっていた。

エステル「あの、ルルリエの花びらを持っていますか？」

エステルは村長らしき人に聞いていた。

「誰からそれを？確かに持っていますが……」

訳を話すと

「なるほど、そうだった理由で、ルルリエの花びらはハルルの樹に咲く三つの花の一つそれを半年間陰干しにして作る貴重な物、最後のひとつですが、樹がよみがえるのであれば、」

村長はエステルに渡した。

エステル「ありがとうございます」

カロール「これでパナシアボトルが作れるね」

ユーリ「よろず屋に行くぞ」

=====

よろず屋でパナシアボトルを作ってもらい、ハルルの樹の前に街の人々が集まっている。

「おおつ、毒を浄化する薬ができましたか!？」

村長が代表として聞いてきた。

ユーリ「カロール、任せた。面倒なのは苦手だね」

ユーリは持っているパナシアボトルをカロールに渡した。

カロール「え? いいの? じゃあ、ボクがやるね!」

カロールは、はしやぎながらセットしに行った。

エステル「カロール、誰かにハルルの花を見せたかったんですね?」

レイ「多分ね、(ナンちゃんに見せたかったのか)」

ピカーン

樹が光り浄化していく。

エステル「樹が……」

「お願いします。結界よ、ハルルの樹よ、よみがえってくださいね」

しかし、全てを浄化する事は出来なかった。

「そ、そんな……」

カロール「うそ、量が足りなかったの? それともこの方法じゃ……」

エステル「もう一度、パナシアボトルを!」

「それは無理です。ルルリエの花びらはもう残っていません」

エステル「そんな、そんなのって……」

レイ（おっ 始まるかな）

エステルは手を胸の前で組み目を瞑った。

エステル「……お願い」

エステルの体が光だした。

ユーリ「エステル……」

ユーリは心配そうに見ていた。

エステル「咲いて」

するとハルルの樹の魔導器が光だし、枯れていた花達が咲き始めて結界が出来た。

カロル「す、すごい……」

「こ、こんなことが……」

「今のは治癒術なのか……」

「これは夢だろ……ありえない……でも……」

レイ「おっと、お疲れ様。」

エステルが倒れそうになったのを、受け止めた。

エステル「はあ……はあ……あ……ありがとうございます。」

子供達が近づいてきた。

「お姉ちゃん！すごい！すごいよ！」

「ありがとうございます！ハルルの樹を元気にしてくれて！」

お礼を言つと子供達はハルルの花をみに行った。次に村長がお礼を言った。

「ありがとうございます。これで、まだこの街もやっていきます…

…」

エステル「わ、わたし、今なにを……？」

ユーリ「すげえな、エステル。」

カロルはユーリに近づきハイタッチをした。

レイ「俺達もやるか」

パチッ

俺はエステルとハイタッチをした。

ユーリ「フレンのやつ、戻ってきたら、花が咲いてて、ビックリだろつな……ざまあみろ」

エステル「ユーリとフレンって不思議な関係ですよ。友達じゃないんです？」

レイ「ただの昔馴染みっただろ」

ユーリ「だな」

ラピードが何かに気付きユーリに近づいた。ラピードの目線を見ると怪しい人達がいた。

エステル「あの人達、お城で会った……」

ユーリ「住民を巻き込むと面倒だ。見つかる前に一旦離れよう」

レイ「はあ、本当にユーリはいろんな奴に好かれているね。」

カロル「え？なにになに？どうしたの急に！」

急いで下に降りって行った。

ユーリ「面倒な連中が出てきたな」

エステル「ここで待っていればフレンも戻ってくるのに」

カロル「そのフレンって誰？」

ユーリ・レイ「エステルが片想いしている帝国の騎士様だ」

カロル「ええっ……！」

エステル「ち、違います。！！」

ユーリ・レイ「あれ？違うのか？ああ、もうデキてるってことか」

エステル「もう、そんなんじゃないありません」

少しやりすぎたかな？エステルは怒っていた。

ユーリ「ま、なんにせよ、街から離れた方がいいな」

エステル「そうですね。街の皆さんに迷惑をかけたくありません」

エステルは怒るのをやめて今度は落ち込んだ。

レイ「フレンの行き先がわかるなら追い掛けたら？」

俺の意見にユーリが反応して

ユーリ「確か、東に向かったって言ってたよな」

エステル「はい」

ユーリ「……アスピオってのがどこにあるか知らねえけど、とりあえず、今は急いでここを出た方がいいみたいだな」

出て行こうとしたら、村長に呼び止められた

「待ってください、花のお礼がしたいので、我が家へおいでください」

エステル「そんなお礼だなんて……」

「私でお力になれることならなんなりと……」

エステル「そのお気持ちだけ、いただいております」

「そうですか……でしたら、わづかばかりですが、どうぞお受け取りください」

村長はユーリにお金を渡そうとした。

ユーリ「オレ？何もやってないぜ」

「しかし、お連れさんにお世話になりましたので……」

カロル「じゃ、じゃあ……」

それを聞いたカロルが貰おうとした。

エステル「いえ、それは受け取れません」

カロル「あ……ええと、じゃあボクもいらない、かな……と」

「いや、しかし、それでは気持ちの収まりが付きません。」

レイ「じゃあ、今度遊びにきた時に、特等席で花見つてのは？」

俺は、皆に確認を取った。

ユーリ「だな。」

エステル「あ、それいいですね。とても楽しみです。」

カロル「うん。賛成！」

レイ「決定だね。」

「……分かりました。その時は腕によりをかけて、おもてなしさせて、いただかます。」

ユーリ「あ、ひとついいか？アスピオって街に聞き覚えない？」

ユーリは気になっていた事を聞いた。

「……アスピオ？ああ、日陰の街が、確かそんな名だったような……」

ユーリ「日陰の街？」

レイ「洞窟の中に街があるからだ」

ユーリ「知ってんのか？」

レイ「まあ行ったことが、あるからね。」

ユーリ「お前、何でそれを言わないんだよ！」

レイ「いや、聞かれてなかったし。」

ユーリ「はあゝまあいいや、でどっちの方角だ？」

レイ「東だね」

エステル「フレンが行った方角と同じ」

ユーリは村長さんにお礼を言っていた後に

ユーリ「待つてろよ、モルディオのやろっ」

ハルルの街を後にして、アスピオに向かった。

ハルルの街（後書き）

約2週間、間隔で投稿したいと思っています。

アスピオ（前書き）

主人公の髪型は、常にポニーテールぽいのにしている。

本気になると、髪をおろす、なので余り見ることができない。

アスピオ

レイ「ここが、アスピオ」

カロール「薄暗くてジメジメして……おまけに肌寒いところだね。」

エステル「街が洞窟の中にあるせいですね」

ユーリ「太陽見れねえと心までねじくれんのかね、魔核盗むとか」

レイ「……まあ、とりあえず中に入ろう。」

進んで行くと入口の前に騎士が二人立っていた。

「通行許可証の提示をお願いします」

エステル「許可証……ですか……？」

エステルが若干困った様に言うともう一人の騎士が

「ここは帝国直属の施設だ。一般人を簡単に入れるわけにはいかな
い」

カロール「そんなの持ってるの？」

カロールが皆に聞いた。

レイ「多分、持っていないんじゃない。」

俺がカロルに答えてると、ユーリが騎士達と話してた。

ユーリ「中に知り合いがいんだけど、通してもらえない？」

「正規の訪問手続きをしたなら、許可証が渡っているはずだ。その知り合いとやらからな」

ユーリ「いや、何も聞いてないんだけど、入れないってなら、呼んでくれないかな？」

「その知り合いの名は？」

ユーリ「モルディオ」

ユーリが名前を言うと騎士達が驚いて、怯えた声で答えた。

「モ、モルディオだと!？」

「や、やはり駄目だ。書簡にてやり取りをし、正式に許可証を交付してめえ」

カロル「ちえ、融通きかないんだから」

カロルの言葉に騎士が怒り武器に手をかけようと、していたらカロルはすぐにユーリの後ろに隠れた。

エステル「あの、フレンという名の騎士が、訪ねて来ませんでしたか？」

エステルは自分の目的を騎士に聞いていた。

「施設に関する一切は機密事項です。些細なことでも教えられませんか」

エステル「フレンが来た目的も？」

「もちろんです。」

レイ「つてことは、フレンがここに来たってことだな。良かったな、エステル」

エステル「はい。」

騎士は慌てて

「し、知らん！フレンなんて騎士は……」

エステル「じゃあ、せめて伝言だけでもお願いできませんか？」

ユーリ「やめとけ、こいつらに何言っても時間の無駄だつて」

ユーリはそう言つと違う所に歩いて行つた。それに続く様に俺達も歩いて行つた。

ユーリ「冷静にいいいぜ」

エステル「でも、中にはフレンが……」

カロール「諦めちゃっていいの？」

エステル「絶対に諦めません！今度こそフレンに会うんです」

ユーリ「オレはモルディオのやつから、魔導器取り返して、ついでにぶん殴ってやる」

レイ「じゃあ、他の出入口を探すか」

ユーリ「それ、採用。ぐるっと回ってみようぜ、いざとなれば、壁を越えてやりやあい」

䷀

ガチャ
ガチャ

ユ一リ「都合よく開いちゃいないか」

今、裏口を見つけてユーリが扉を開けようとしたところだが、カギがかかっていた。

エステル「壁を越えて、中から開けるしかないですね」

ユ一リ「早くも最終手段かよ……」

ユーリとエステルが話している時に俺とカロルは……

レイ「カール開けるか？」

「カロリー多分、大丈夫だと思うよ。」

ガチャ ガチャ、ガチャ カチ

カロルにカギを開けてもらっていると、エステルがこちらに気づいた。

エステル「カロル、何をしてるんです？」

カロル「よし、開いたよ」

エステル「え？だ、だめです！そんなドロボウみたいなこと！」

ユーリ「……おまえのいるギルドって、魔物狩るのが仕事だよな？盗賊ギルドも兼ねてんのかよ」

カロル「え、あ、うん……。まあ、ボクぐらいだよ。こんなことまでやれるのは」

カロルは焦りながら答えた。

レイ「ご苦労さん、じゃあ行こうか」

俺とユーリは扉から中に入ろうとしたら

エステル「ほんとに、だめですって！フレンを待ちましょう」

ユーリ「フレンが出てくる偶然に期待できるほど、オレ、我慢強くないんだよ。だいたい、こういうときに法とか規則に縛られるのが嫌でオレ、騎士団辞めたんだし」

エステル「え、でも……」

レイ「じゃあ、エステルはここで見張りだな」

エステル「え、えっと、でも、あの………っ！ーわ、わたしも行きますっ」

キィ

中に入った。

ユーリ「なんかモルディオみたいのがいっぱいいるな……」

するとエステルが近くにいた男の人に話しかけた。

エステル「あの、少しお時間よろしいです？」

「ん、なんだよ？」

エステル「フレン・シーフォという騎士が訪ねて来ませんでしたか？」

「フレン？ああ、あれか、遺跡荒しを捕まえるとか言ってた……」

エステル「今、どこに！？」

「さあ、研究に忙しくてそれどころじゃないからね」

エステル「そ、そうですか。……ごめんなさい」

エステルは少しがっかり様に言った

「じゃあ、失礼するよ」

去ろうとしていたが、ユーリに止められた

ユーリ「ちょ、待った。もうひとつ教えてくれ、ここにモルディオって天才魔導士がいるよな？」

男は驚いて

「な！あの変人に客！？」

ユーリ「さすが有名人、知ってた」

「……あ、いや、何も知らない俺はあんなのとは関係ない……」

男は逃げようとしたがユーリに捕まった。

ユーリ「まだ話は全然終ってないって」

「もう！なをだよ！」

ユーリ「どこにいの？」

「奥の小屋にひとりで住んでるから、勝手に行けばいいだろ！」

ユーリ「サンキュ」

カロル「大丈夫なの？」

ユーリ「ん？」

カロル「名前出ただけで、みんな嫌がるなんておかしいよ」

エステル「気になりますね」

ユーリ「そりゃ、魔導器ドロボウだしな。嫌われてんのも当然だろ」

あいつは、絶対にドロボウなんてしないと、思っただけど……

=====

エステル「絶対、入るな、モルディオ」

ユーリ「ここか……」

ガチャ、ガチャ コン、コン

ユーリは最初に扉を開けようとしてカギがかかっていたから、ノックをした。普通逆だろ……

エステル「普通はノックが先ですよ……」

おっ言ってくれた。

カロル「いないみたいだね、どうする？」

ユーリ「悪党の巢に乗り込むのに遠慮なんていらないうて」

エステル「だ、だめです。これ以上罪を重ねないでください」

カロル「なら、ボクの出番だね」

いやいやいや、エステルの話し聞いてないし、

エステル「え……？ 出番って……」

カチャ、カチャ、カチャ、

カロルはカギを開けようとしていた。

エステル「それもだめですって！」

カロル「ま、ちよろいもんだね」

ユーリはカギが開いたので小屋に入ろうとしていた。

カロル「待って！ ボクも行くよ」

エステル「あ、待ってください！ もう、どうしてこつ……」

レイ「あつ、俺外で待ってるから」

キィ

ユーリ達は中に入って行った。

それにしても、待っているだけって退屈なもんなのね、何か面白い事でも起きないかな？

ドゴーン

ん？中から爆発した音が聞こえた。あつ、カロルがリタに攻撃されるんだった、でも俺が中入ると俺も攻撃されるかもしれないし、…てか絶対に攻撃される！

？「なっとなななな、何でレイがここに居るのよ！？」

ユーリ達とリタがいつの間にかいた。

レイ「お、おう、ひ、久しぶりだな。リタ」

チッ、隠れようとしてたのに気づくの遅かった。

リタ「何が久しぶりよ！！あんた何も言わずに突然居なくなるし、…覚悟はできてるんでしょうね。」

レイ「何も言わずって、一様手紙書いてたじゃん。」

リタ「うるさい」

リタは俺に向かって、ファイアボールを撃ってきた。
だが、攻撃されるのは、わかっていたから簡単に回避した。

レイ「ちょ、危ないだろ。てか、どっかに行くのか？」

リタは攻撃するのをやめて、少し考えて

リタ「……ちょうどいいレイもついて来て」

レイ「何処にだよ。」

リタ「シャイコス遺跡よ。」

確か盗賊団がいるんだっけか？

レイ「わかった。お前には世話になったしな。」

アスピオを出て、シャイコス遺跡に向けて東に向かった。

シャイコス遺跡 ？（前書き）

遅くなりました。

すみません。

シャイコス遺跡 ？

リタ「ここがシャイコス遺跡よ」

いかにも遺跡って所だな

エステル「騎士団の方々、いませんね」

レイ「いや、奥にいるかもしれない、見てみこの足跡」

ユーリ達は足跡を見た

カロール「この足跡、まだ新しいね。数もたくさんあるよ」

ユーリ「騎士団か、盗賊団か、その両方かってところだろ」

エステル「きっと、フレンの足跡もこの中にあるんでしょっね」

ユーリ「かもな」

リタ「ほら、こっち。早く来て」

ユーリは皮肉混じりに

ユーリ「モルディオさんは暗がりに入れ込んで、オレらを始末する気だな」

リタは不気味な笑みを浮かべて

リタ「……始末、ね。その方があたし好みだったかも」

うわゝゝめっちゃこえゝゝ（笑）

カロール「不気味な笑みで同調しないでよ」

エステル「な、仲良くしましうよ」

奥に進んで行つた。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

ユーリ「騎士団も盗賊団もいねえな」

エステル「もっと奥の方でしょうか？」

ユーリ「奥つていつてもなあ」

辺りを見渡した

カロール「誰がいるようには見えないよね」

リタは少し考えてから

リタ「まさか、地下の情報が外にもれてんしゃないでしょうね」

エステル「地下？」

リタ「ここ最近になって、地下の入り口が発見されたのよ、まだ一

部の魔導士にしか、知られてないはずなのに…」

ユーリ「それをオレらに教えていいのかよ」

ん？確かこの石像の下に地下の入り口があつたはず…早速動かすか

リタ「しょうがないでしょ。身の潔白を証明、ギイーギイーするた
めって、レイ何やってんのよー!!」

レイ「何って動かしてる？」

リタ「何でこつちに聞いてんのよー!!ギイーギイー、話を聞け」

なつ、いきなり攻撃してきやがつた。近くには、カロールがいる
ならやることは1つ

レイ「カロールガード」

カロール「え？ちよつ、なつ、って、ギヤア~~~~」

ドッカーン

レイ「ひどいな、お前ないきなり攻撃するなよ、危ないだろ！」

リタ「う、うるさあい」

ユーリ「いや、ひどいのは、お前だろ」

カロール「う~~~~う、ひどいよ」

エステル「カロール大丈夫です？」

ギーギー

レイ「ほら、あつた。早く行こうぜ」

リタ「ちょっと何であんたが入り口知っているのよ！」

レイ「うゝん」

少し考えて

レイ「缶」

リタ「殺すわよ、しかも字が違う」

レイ「ゴメン。ちょっとこれを動かした形跡があつたから、もしかしたらつて思つてな。」

リタ「まあいいわ、行くわよ」

地下の中に入って行つた。

エステル「遺跡のなんて入るのはじめてです……」

エステルが進もうとしたら、リタが声をかけた。

リタ「そこ、足元滑るから気をつけて」

するとユーリがリタを見ていた

リタ「なに見てんのよ」

ユーリ「モルディオさんは意外とお優しいなあと思ってね」

リタ「はあ……やっぱり面倒を引き連れてきた気がする……レイだけで良かったかも。」

レイ「つつても、いつもひとりで調査してるじゃん。」

エステル「いつもひとりで調査してるんですか？」

リタ「そうよ」

エステル「罾とか魔物とか、危険なんじゃありません？」

リタ「何かを得るためにリスクがあるなんて当たり前じゃない、その結果、何かを傷付けてもあたしはそれを受け入れる」

エステル「傷つくのがリタ自身でも？」

リタ「そうよ」

エステル「悩むことはないんです？ためらうとか……」

リタ「何も傷付けずに望みを叶えようなんて悩み、心が贅沢だからできるのよ」

エステル「心が贅沢……」

リタ「それに、魔導器はあたしを裏切らないから……。面倒がなくて楽なの」

それを言うとリタは奥に進んで行った。

エステル「なんか、リタって、すごいです。あんなにきつぱりと言
い切れて」

ユーリ「何が大切なのか、それがはつきりしてんだな」

エステル「わたしは、まだその大切がよくわかりません……」

ユーリ「適当に旅して回ってりゃあ、そのうち、嫌でも見つかるっ
て」

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

シャイコス遺跡 ？（後書き）

学校が……

今月中に最低でも、もう一回投稿したいと思います。

シャイコス遺跡？

やっと着いたぜ、いやあ〜とても面倒だった。何がって？まあとにかく面倒だったんだ。

今は、魔導器？が居る所に着いたばかりなんだけど……リタが…

ユーリ「あ、おい！」

リタが魔導器？に近付いた

カロール「うわ、なにこれ？！これも、魔導器？」

ユーリも近付いた

ユーリ「こんな人形じゃなくて、オレは水道魔導器がほしいな」

リタ「ちよつと、不用意に触らないで！」

リタ「この子を調べれば、念願の自立術式を……あれ？、うそ！この子も、魔核がないなんて！」

ユーリ「リタ、お前のお友達がいるぜ」

白いマントを着た怪しいヤツがいた。

リタ「ちょっと！あんた、誰？」

「わ、私はアスピオの魔導器研究員だ！」

レイ「だつてよ」

「お前達こそ何者だ！ここは立ち入り禁止だぞ！！」

リタは若干呆れた感じに

リタ「はあ？あんた救いようのないバカね、あたしはあんたを知らないけど、あんたがアスピオの人間なら、あたしを知らないわけないでしょ」

カロール「……無茶苦茶言うなあ」

レイ「でも、実際そうだからね……」

白いマントを着たヤツは、魔導器？に近付いて

「くっ！邪魔の多い仕事だ。騎士といい、こいつらといい！」

魔核を入れた

魔導器？は動きだした。

カロール「うつわーっ、動いた！」

エステル「リタ！」

リタは殴り飛ばされて柱に激突した。

エステル「いま、傷を……！」

エステルは治癒術を使いリタの傷を治した。

リタ「あんた、これって……」

リタはエステルの左腕を掴んだ。

エステル「な、なに！？」

リタ「今の……」

エステル「え、えっ？ただケガを直そうと……」

ヒュッ、ドン

魔導器？がユーリ達に攻撃を仕掛けていた

カロール「ちょっと！サボってないで手伝って！」

リタ「あゝ、もうしょうがないわね！」

白いマントを着たヤツはその隙に逃げていた。

リタ「あたし、あのバカ追うから！ここはあんたらに任せた！」

ユーリ「任せたって、行けねえぞ！？」

リタ「……ああ！あのバカのせいで！！」

ユーリ「仲良く人形遊びするしかねえな」

リタ「速攻ぶっ倒して、あのバカをおうわよ！」

レイ「一撃で倒してやる。ユーリ！少しだけ時間作って！」

ユーリ「分かった。いくぞ、オラっ！蒼破！！」

相手に向かって衝撃波を打ち出した。

しかし、余り効果はなく、すぐさま攻撃を仕掛けて来たが、ユーリは簡単に避けた。

ユーリ「チツ、全く効いてないのは、ちょっとショックだなあ」

レイ「ユーリ下がって」

ユーリは下がった

レイ「壊したら、リタに殺されるかもしれないから、手加減してやる。」

デモンズランス」

闇の力で生み出した槍を相手の頭上に降らせた。

ドゴーン

魔導器？は動きが止まった。

リタ「あとは動力を完全に絶てば……ゴメンね……」

完全に動きが止まった。ユーリとラピードは白いマントを着たヤツの後を追って行った。

カロール「リタも早く！」

リタ「わかってるわよ！」

カロールとレイはユーリの後を追った。

リタ「あんたも早く！」

リタは立ち止まっているエステルに向かって言っていた。

エステル「でも、フレンは……」

レイ「あんな怪しい奴がいるところに、騎士団はいないだろ。」

エステル「じゃあ、もうフレンは……」

レイ「多分、もうここにはいない、」

リタ「あの子を調べたら自立術式が解析できたのに！」

カロール「そのためにボクらを戦わせたの？」

レイ「正確には、俺とユーリな」

リタ「当たり前でしょ」

カロール「極悪人だよ！」

リタ「ドロボウ探しのついでに手伝ってもらっただけよ」

ユーリ「口じゃなく足使えよ!!」

|||||

カロール「あ、いたよ！」

白いマントのヤツは、魔物に囲まれていた。

ラピード「ガウ、」

ユーリ「蒼破ッ」

レイ「ユーリ真似して、蒼破ッ」

ザシュ、ザシュ、ザシュ

魔物は消滅した。

リタ「魔核盗んで歩くなんてどうしてやるつかしら……」

「ひいっ！やめてくれ！や、やめて、もう、やめて！俺は頼まれただけだ……。魔導器の魔核をもってくれば、それなりの報酬をやるって」

ユーリ「お前、帝都でも魔核盗んだよな？」

「帝都？お、俺じゃねえ！」

ユーリ「お前じゃねえってことは、他に帝都に行った仲間がいるんだな？」

「あ、ああ！デ、デデッキの野郎だ！」

ユーリ「そいつはどこ行った？」

「今頃、依頼人に金をもらいに行ってるはずだ」

ユーリ「依頼人だと……。どこのどいつだ？」

「ト、トリム港にいてっただけで、詳しいことは知らねえよ、顔の右に傷のある、隻眼でバカに体格のいい大男だ」

ユーリ「そいつが魔核集めてるってことかよ……」

リタ「ソーサリーリングもどこかで盗んだのね」

「ぬ、盗んでなんていねえ！仕事の役に立つって依頼人に渡されたんだ！！」

リタ「うそね。コソ泥の親玉なんかに入られるものじゃないわ」

「ほ、本当だ！信じてくれよ！」

カロール「なんか話が大掛かりだし、すごい黒幕でもいるんじゃない？」

ユーリ「カロール先生、冴えてるな。ただのコン泥集団でもなさそう
だ」

「騎士も魔物もやり過ぎて奥まで行つたのに！
ついてねえ、ついてねえよっ！」

エステル「騎士？やはりフレンが来てたんですね」

「ああ、そんな名前のやつだ！くそー！あの騎士の若造め！」

リタ「……うつさい！」

リタは自分の武器で攻撃して、気絶させた

カロール「ちょ、リタ、気絶しちゃったよ……どうすんの？」

リタ「後で街の警備に頼んで、拾わせるわよ」

ユーリ「それじゃあ、アスピオに戻るか」

シャイコス遺跡を出てアスピオに向かった。

シャイコス遺跡？（後書き）

今月最後の投稿かも…

アスピオそれから……（前書き）

遅れてすみません???

ちょっとした、用事で今月の投稿は、最後になるかも……

アスピオそれから……

アスピオに到々着！！

到着はしたんだけど、エステルが落ち込んでるだよね。あの色男め！お姫様に心配させるなよ

エステル「……肝心のフレンはいませんでしたね」

リタ「その騎士、何者なの？」

リタが疑問に思ったのか聞いてきた

エステル「ユーリとレイの友達です」

リタ「ふん、あんたらの友達ね。それは苦労するわ」

ユーリ「なんだよ？」

リタ「別に。で、何でそいつがこの街にいるの？」

エステル「ハルルの結界魔導器を直せる魔導士を探して……」

リタの疑問をエステルが答えると思い出した様に

リタ「ああ……あの青臭いのね……あたしのところにも来たわ」

エステル「フレン、元気そうでした？」

リタは適当に

リタ「元気だったんじゃない？」

レイ「疑問を疑問系で返す。さっすがリタ！」

リタ「うつさい！

騎士の要請なら他の魔導士が動くだろうし、もうハルルに戻ったんじゃない？」

エステル「……そんな……」

リタ「で？疑いは晴れた？」

エステル「リタは、ドロボウをするような人じゃないと思います」

ユーリ「思っただけじゃ、やってない証明にはならねえな」

エステル「でも……！」

リタ「いいよ、かばってくれなくて、けど、本当にやってないから」

ユーリ「ま、お前はドロボウよりも研究の方がお似合いだもんな」

エステル「ユーリは素直じゃないんです」

リタ「……変なやつ」

レイ「まさか、ユーリもツンデレ!？」

もしそうだったら……男がツンデレって……ないな、うん。

リタ「警備に連絡してくるから、先にあたしの研究所戻ってて」

ユーリ「って言われても、あのこわいおじさん達が通してくれるかどうか」

ヒューン、パシッ

リタがユーリに向かって何かを投げて、ユーリがそれをキャッチした。

リタ「そうね、これ持ってた
それ見せれば、通せるから」

ユーリ「サンキュ」

リタ「いい?あたしの許可なく街出たら、ひどい目にあわすわよ」

リタは捨て台詞みたいなことを言って、街の警備の所に行った。

レイ「さて、そろそろ俺も行くかな」

外に出ようとしたらユーリに声をかけられた

ユーリ「いいのかよ、待たなくて」

レイ「いいんだよ、俺は

でもお前ら待ってるよ、なにされるか、分からないからな。」

ユーリ「お前は大丈夫なのかよ？」

レイ「俺？俺は大丈夫だよ。なんたつて無敵の盾があるから！」

カロールを見ながら答えた。ユーリとエステルは苦笑いしていた

カロール「ぼつ僕は盾じゃないよ！？」

カロールが何か言っているが、気にしない、気にしない

アスピオを出て外に行った。

アスピオそれから……（後書き）

テイルズの最新作が9月発売ですね。

おまけ？（前書き）

またスキット風に

おまけ？

話がズレてる

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

エステル「そう言えば、リタとレイは、何処で知り合ったんです？」

レイ「あれ？言ってなかったけ？」

ユーリ「聞いてねえよ」

レイ「あれ〜？ユーリくん、嫉妬ですか〜？」

ユーリ「何でそうなるんだよ〜！」

レイ「そんなに嫉妬するなよ、このカラダはユーリのものだ・か・

ら
」

カロール「やっぱり二人ってそんな関係だったんだ。」

ユーリ「はあ……カロール先生一つ言っておく、レイは男だからな」

カロール「別に隠さなくたって……ってええ……！！？男！！？！！？」

レイ「当たり前だろ、他に何に見えるんだよ。全く」

カロール、ユーリ、エステル、（逆に、一回見ただけで、男だって分かる人に会って見たい。（です。）（よ。）（）

リタ「……話がズレてるわよ」

おまけ？（後書き）

おまけ？（前書き）

またまたスキット風です。

おまけ？

マヂかよ

|||||

エステル「そう言えば、リタとレイは、何処で知り合ったんですか？」

レイ「あれ？言っ てなかつ たけ？」

ユーリ「聞いてねえよ」

レイ「あれ〜？ユーリくん、しっ「そのパターンはもういいかな！」チッ……別にそんなにたいしたことないぞ、倒れてた所をリタに助けてもらったただだよ。」

ユーリ「お前はそこら辺の魔物に敗れたりしないだろ？」

レイ「別に魔物に敗けて倒れてたじゃなくて、空腹で……ね」

リタ「あの時は、驚いたわよ、道の真ん中に人が倒れてたんだか

ら。素通りしてもよかったんだけど、見付けてしまったからね。仕方なくよ」

レイ「それでも、助かったんだよ。サンキューな」

リタ「そんなことより、レイあの子に会った？」

エステル「あの子？」

リタ「レイが誘拐してきた子のことよ。」

エステル「ゆ、誘拐したんですか!？」

レイ「はあゝゝ」

魔物に襲われるところを助けたんだよ。そしたら、その子が気絶してて、そのまま置いて帰るのも、あれだから連れて来たんだよ。……ってこれってある意味誘拐じゃん!? 俺いつの間にか誘拐してたのか…orz」

リタ「だ・か・ら・あ・の・子・に・会ったのか聞いてるの!!」

レイ「すいません。会いませんでした。はい。」

リタ「そうなの？あの子、あんたを追って居なくなったのよ。」

レイ「マチかよ」

おまけ？（後書き）

エフミドの丘（前書き）

すいません。遅れました。

ちょっとした事情で投稿出来なくて……

エフミッドの丘

ユーリ達と別れて今は、ハルルの花を見ていた。

ん？確か、エフミドの丘って誰かによつて、結界魔導器が壊されて迂回しなきゃいけないんじゃないか？たけ？面倒くせえから壊される前に通るか、

[illegible]

レイ「到着つと、まだ壊されてないよな？」

エフミドの丘に着いて結界魔導器が壊れてないか周りを見渡したが壊れてわいなかった。

レイ「よかったゝまだ壊されてなかった。」

安堵した様子でエフミドの丘を抜けようと出口の辺りまできたら、後ろが騒がしくなっていたので振り向くと、ドラゴン？竜？の上に乗った人が結界魔導器を壊していた。

レイ「マジか！あぶねゝ後ちよつとでも遅れていたら、迂回しなきゃいけないところだった。うん？」

何か目線を感じるから周りを見渡したが誰もいなかった。疑問に思いもう一度周りを見渡したが、やはり誰もいなかった。ふと上の方を見ると、竜使いがこちらを見ていた。

レイ《そんなに、珍しいかい？俺が？》

？「！！！！（彼が……）」

呼び掛けてみたが、少し反応があったがすぐにどこかにいなくなった。

レイ「あゝあ、呼び掛けてみたけど反応はなし、か……べつ別に寂しくなんかないんだからね!!」

って何で独りツンデレやってんだろ……さて、どーすんべ、このまま先に進むか、それともユーリ達を待つか

よし!待とう。先に進んでもフレンに会うだけだし多分。あゝ〜速くユーリ達来ないかな?……………待てよ、確かソコソコ強い魔物出るんじゃないか?つってもユーリがいるし心配いらないか。まあピンチになったら助ければいいか、ってことでレッツゴ

!

一方ユーリ達は…

一方その頃ユーリ達はリタの家にいて、カロール、ユーリ、ラピードは横にならくつろいでいて、エステルは落ち着かない様子で同じ所を行ったり来たりしていた。

ユーリ「フレンが気になるなら黙って出ていくか？」

落ち着きがないエステルに向かってユーリが声をかけた。

エステル「あ、いえ、リタにもちゃんと挨拶をしないと……」

ユーリ「なら、落ち着けて」

カロールはくつろいでるユーリ向かってこのあとの事を聞いた

カロール「ユーリはこのあと、どうするの？」

ユーリ「魔核ドロボウの黒幕のところに行ってみっかな、デデッキってやつも同じとこ行っみたいだし」

カロール「だったら、ノール港まで一直線だね！」

ユーリ「トリム港って言ってなかったか？」

それを聞いたカロールは少しバカにしたように

カロール「ユーリ、知らないんだ」

ユーリ「知らないって何を？」

カロール「ノールとトリムは、ふたつの大陸にまたがった、ひとつの街なんだよ。このイリキア大陸にあるのが港の街カプワ・ノール。通称ノール港。

お隣のトルビキア大陸には、港の街カプワ・トリム。通称トリム港ってね。だから、まずはノール港なの。途中、エフミドの丘があるけど、西にむかえばすぐだから」

カロールの説明を聞いたエステルが

エステル「わたしはハルルに戻ります。フレンを追わないと」

ユーリ「…………じゃ、オレも一旦、ハルルの街へ戻るかな」

ユーリの発言にカロルは、慌てて

カロル「え？何で？そんな悠長なこと言ってたら、ドロボウが逃げちゃうよ！」

ユーリ「慌てる必要ねえって。あの男の口ぶりからして、港は黒幕の拠点っぽいし、それに、西行くなら、ハルルの街は通り道だ」

カロル「えゝ、でもお…………」

ユーリ「急ぐ用事でもあんのか？好きな子が不治の病気で、早く戻らないと危ないとか？」

カロルは、ボソッと

カロル「そんなはかない子なら、どんなに…………」

キー

扉が開いてリタが入ってきてユーリ達を見て

リタ「待つてろとは言ったけど……どんだけくつろいでんのよ。」

エステル「あつ、お帰りなさい。ドロボウの方はどうなりました？」

リタ「さあ、今ごろ、牢屋の中で、ひひひ泣いてんじゃない？」

ユーリは立ち上がり、リタに向かって

ユーリ「疑って悪かった」

リタ「軽い謝罪ね。ま、いいけどね、こっちも収穫あったから」

喋りながら、奥に歩いて貼ってある（……）を見た後エステルを見た

エステル「リタ？」

ユーリ「んじゃ、世話かけたな」

リタ「なに？もう行くの？……って1人足りないけど」

ユーリ「長居してもなんだし、急ぎの用もあるんだよ。レイは知らねえけど」

リタ「あいつ……」

エステルは一礼した

エステル「リタ、会えてよかったです。急ぎますのでこれで失礼します。お礼はまた後日」

リタ「……わかったわ」

カロルはツツコミをいれた。

ユーリ「いいのかよ？おまえ、ここの魔導士なんだろう？」

ユーリの言葉にリタは少し考える様に悩んでいた。

リタ「……んん……！！そうだ、ハルルの結界魔導器を見ておきたいのよ。壊れたままじゃまずいでしょ」

リタが適当な理由を見つけて言ったが、カロルに

カロル「それなら、ボクたちで直したよ」

リタ「はあ？直したってあんたらが？素人がどうやって？」

カロル「よみがえらせたんだよ、エステ……」

ユーリ「素人も、侮れないもんだぜ」

カロルが答えようとしたら、途中でユーリが被せて答えた。それを見たリタはニヤツと笑い

リタ「ふうん、ますます心配。本当に直ってるか、確かめないと」

ユーリは呆れた様に

ユーリ「じゃ、勝手にしてくれ」

するとエステルがリタに近付いた。

リタ「な、なに!？」

エステル「わたし、同年代の友達、はじめてなんです!」

リタ「あ、あんた、友達って…」

エステル「よろしくお願いします」

リタ「え、ええ……」

ユーリはそれを(……)横目で見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4653r/>

転生 ヴェスペリア

2011年11月17日21時40分発行